

(佐々木注) 2007年1月24日作成

原題「駆逐艦夕立の最期」原文はB5判3ページ(ページ番号なし)。
以下、原文をそのままA4判に変換し、欄外にページを付与したもの。

19. 1. 25

中村悌次

駆逐艦夕立の最期

昭和17年11月13日深夜(もはや14日になっていた)、ガ島ルンガ飛行場とサボ島との中間付近の海域で、駆逐艦夕立は航行不能の状態、単独敵中に残されていた。後に第三次ソロモン海戦と言われた戦闘で、「夕立」は吉川潔艦長指揮のもと獅子奮迅の働きをして大きな戦果を挙げたが、「長良」と覚しい巡洋艦の砲撃により大きい被害を受けたのである。

(注)当時、敵のレーダー使用は聞いていたが、多年錬磨の我が見張りに対する自信は、まったく揺るいでいなかった。このときも照射砲撃を受けるずっと前に、巡洋艦を発見、射撃準備は完了していたが、「これは味方」「これは長良」との見張りの報告を信頼して、艦長は砲撃を控えていたのである。私自身も自分の眼鏡で確認したが、「長良」に間違いないと認めた。戦後海上自衛隊になって、当時の長良砲術長久原一利氏(のち海将)と論議したが、確認は得られなかった。しかし当時の夕立乗員はその後「長良」に撃たれたと信じている。

先程までの修羅のちまたが嘘のように静まり返った中で、敵艦数隻が同じように火災を起こしたまま動けずにいる。この少し前、2隻の味方艦が近くを通過していった。1隻はその「長良」、10戦隊の旗艦である。「我夕立、航行不能」と報告した。「長良」は了解したまま、何も言はずにそのまま遠ざかっていったが、あとで分かったところによると、「夕立」の属している第2駆逐隊司令に状況を通知、司令の命によって同隊各艦(「春雨」を除く、「春雨」は本来「夕立」と行動を共にすべきところ、最初の攻撃直前にはぐれ、後は全く別行動であった。)は「夕立」救援のため、戦場に引き返したということであった。なお「夕立」は電信室被害のため、視覚通信の外一切通信の手段はなかった。

もう1隻は駆逐艦「朝雲」で、この時は直属指揮官の4水戦司令官高間完少将が座乗していた。同じ「夕立」の報告に対し、司令官は「カッター1隻送るにつき、乗員は機宜陸上に避難せよ」と指示して、「朝雲」のカッターを残して去っていった。(「夕立」の短艇は、戦闘で撃砕されていた)ときに0100。「夕立」では艦長初め乗員一同、船を見捨てる気持ちは毛頭なく、折角残してくれたカッターに乗員若干を乗せて、前甲板塗具庫の火災の消火に海上から協力させた。また樫島千蔵前任将校の指示で、艦上部、爆砕されたマスト、煙突その他に帆布、ハンモックを張り巡らせ、帆走を準備した。(当夜の風向、潮流によりガ島北岸に漂着可能と考え、海岸砲台となることを期した)

一方機関は、缶3缶中の2缶および後部機械室が使えるので、これを繋いで何とか行動が出来るよう、機関長戦死後の前任機関科士官(掌機長)が全力を尽くしたが、とうとう機関復旧

不可能との報告がきた。前部の火災はなかなか消火せず、火勢はむしろ強くなり、一番砲の火薬庫は人力注水、明るくなれば、残った3門の砲の砲側照準で戦う以外はないと覚悟した（方位盤も被弾使用不可能）。このとき何を考えていたか、今となっては思い出せないが、応急指揮官として、火災鎮火に懸命であって、余念はなかったと思う。

やがて0155僚艦「五月雨」が救援に来てくれ、「夕立」に横付けし乗員を收容したのち、処分のために魚雷1本を撃って避退した。

（注）「村雨」も救援に来てくれたが、途中「朝雲」にあい、「夕立」救援するに及ばずと、避退する「朝雲」に続行を命じられたという。また「五月雨」の中村乙二艦長は、この前月「由良」が敵機の攻撃を受け駆逐艦に乗員の救助を命じられたとき、外の艦は内火艇で飛び込んだ人を救っているなか、「夕立」だけがまだ弾丸が誘爆している「由良」の後甲板に直接横付けして、多くの乗員を救助したのを見て感激し、「夕立」の骨は俺が拾うと言っていたという。

「五月雨」が処分のために撃った魚雷はその水柱から見て完全に爆発したとは思われず、吉川艦長は再度の処分を要請したが、中村艦長は既に黎明が迫っていたこともあって、あれで大丈夫と言って「夕立」を射撃しながらそのまま避退した。吉川艦長は確実な最期を見届けなかったことに大きな責任を感じ、戦闘概報にも「五月雨の魚雷1本命中せるも、沈没を確認せず」と明確に報告した。

その翌日吉川艦長は私に「君は刀を持って下りたな、それを俺に貸してくれ」と言われる。（私は移乗したとき、家から貰った刀だけを持ってきた）「どうされますか」「さっきのガ島沖の航空偵察によると、一隻曳航して南下している艦があった。あれは「夕立」に違いない。俺は決心覚悟を決めた」「もしそれが「夕立」であったら決してお留めはしませんが、よく確認されてからでも遅くないと思います。敵は宣伝の国、もしそうであれば必ず発表するでしょう」このようなやりとりはあったものの、その後アメリカの発表もなく、ことはそのまま終わり、吉川艦長は「大波」艦長として18年11月ブカ島沖で戦死された。

このような経緯から、私にとって果たして「夕立」の最期はどうであったかは、大きな問題であり、戦後米側の記録が発表されると、先ずこれを確かめたが、14日天明後、航行不能であった米巡洋艦が砲撃撃沈したとあった。矢張り、吉川艦長が心配されたとおりの「五月雨」の魚雷は命中爆発してなく、「夕立」はそのまま浮いており、もし米側にその気があれば、捕獲される可能性もあったのである。このことは別の証言によっても確認された。戦後たまたま、ガ島の陸上から見ていた陸軍士官にあうことができたからである。彼は鮮明に14日朝の状況を記憶しており、5隻の艦が動けずにいたが、明るくなるとそのうちの4隻には陸上から支援の船や人がかけつけ、やがて1隻が大砲を撃って残っていた1隻を沈めたとのことであった。

辛うじて「夕立」の名誉を汚さずに済んだわけであるが、本当に危ういところであった。総員離艦に際し、如何に確実に沈没する処置を講じるか、これが、今日も肝に銘じている教訓である。

また直属指揮官であった高間4水戦司令官の指示も「夕立」乗員の不満の種であった。「なんとか艦を救いたい」と言う乗員の気持ちからかけ離れており、「陸上に避難せよ」とは何事か、というわけである。例え曳航は無理であったとしても、「五月雨」のように横付けして乗員を救出すべきであったと思う。司令官が乗っているから、自ら救助は出来ないと考えたとし

たら、それはおかしい。もう戦闘は終わった後である。高間少将は戦後「今までの喧噪が嘘のように静寂に帰った戦場に味方損傷艦救援のため残った私は、あちこちに炎上停止している敵味方4隻の艦を望んで、屢々虚脱無心の夢心地に浸ったものである」（海軍水雷史 567頁）と回想しているが、指揮官であることを忘れては困ると思うことである。

（注）当時「朝雲」には、近藤信孝が航海長として乗っていた。（潜水艦に進んだ者の中から、本多義邦と近藤だけが一時期駆逐艦勤務をした）後で近藤にあったとき、あのときの司令官の指示はおかしいと言ったところ、如何にも近藤らしく「いろいろ考えさせられたよ」と応えたことが、今日も忘れられない。